

北東アジアにおける対話促進への モンゴルの役割 (2007.4.17)

column 1

東アジア総合研究所所長
叶 秋男

2007年4月10日、本学はナツァギーン・バガバンディ前モンゴル大統領をお迎えした。今回、バガバンディ博士（哲学博士・政治学博士）を招聘した目的は、これまでの北東アジアにおける繁栄と平和への貢献と、本学とモンゴル諸大学との交流拡大へのご助力に感謝し、名誉博士記を授与するとともに、その深い見識と貴重なご経験をもってご助言をいただくべく本学東アジア総合研究所の特別顧問にご就任いただくことになったからで、当日はこれを記念して、「学問のすすめ」と題する特別講演をしていただいた。

モンゴルと日本は、北東アジアの中では、地理的に隔たりのある国である。しかしながら、1990年にモンゴルが体制転換を打ち出してから二国間関係は良好になり、「総合的パートナーシップ」の構築を共通目標とすることで合意するまでになった。バガバンディ前大統領がこの進展に果たされた指導的役割は大きい。

バガバンディ博士が本学を訪問された際に、北東アジアに関するご見解を伺って改めて感じたのは、ロシア、中国、韓国、北朝鮮といった北東アジアの国々とわが国の間には、「東アジア共同体」構想を夢物語にしかねない、現在も解決が容易でない問題が横たわっているのに対して、日本・モンゴル間にはそれがないということである（2004年にモンゴル国立大学社会調査研究所が行なった世論調査結果をみても、いわゆる「ノモンハン事変」も国民のわだかまりがほとんどないことを示している）。

それゆえ、わが国が北東アジア外交をうまく進める上で、北朝鮮やロシアにたい政治的パイプを持つモンゴルが果たしうる役割があるし、バガバンディ博士のお話から、モンゴルにその意欲が十分にあることがわかった。日本としてはそれを大いに活用すべきであり、それがまた日本・モンゴル間関係の向上にもつながるはずである。



ステップでの音楽会